

# 伝達方法としての「写真」と「VR」の力について考えた

須藤夏樹 医療機関事務職 大学院非常勤講師

松村和彦講師のご講義を拝聴して

今回の松村講師のお話を聴講して、写真ジャーナリズムという手法に対して改めて凄い手法であると感じた。写真ジャーナリズムでは有名なロバート・キャパ氏やゲルダ・タロー氏のお名前くらいは知っているが、実際の写真の持つチカラについては殆ど知識がない。ベトナム戦争で一枚の写真が反戦運動のキッカケとなった「サイゴンの処刑」や「ナパーム弾の少女」くらいであった。

松村講師が今回提示された写真は、数千文字の文書以上に松村講師の言いたい事が直接心に伝わってくるように感じた。いやそれ以上に、具体的な言語で記載された情報以上のものを受け手に考えさせるのではないだろうか。演出上の工夫にご苦労はされているとのお話であったが、やはり写真の持つ表現力、伝達力は凄いものがあると思った。そして松村講師の写真を見ている人は、認知症を追体験することが出来る。素晴らしい表現方法だと思う。認知症と診断された時の悲しみや不安、一種の絶望感や怒りがモノクロームの写真を通して伝わってくる。そして認知症であることを受け入れ、認知症とともに生きることを選んだ時に光が差して外の世界と繋がる。モノクロームが色づき始める。写真は大きな声で主義主張はしない。見る人が自分で見ている意味を考える。

以前、自分ごととして追体験する手法としてVRによる認知症を体験した。残念ながらVRゴーグルではなくPCのZoomではあったが。それでも自分が認知症になったかのような不安感や戸惑いを体験することができ、圧倒的な臨場感があった。バスから降りようとするステップの下は奈落の底まで続いている感覚になるし、階段や床が歪んでいる。一人称視点で認知症についてより自分事として実感する優れた手法であると感じていた。本人の感じる世界に没入できることは、ある意味写真表現よりも深いかもしれない。しかし、あくまでも一人称としての体験であった。

今回松村講師の写真を見て、認知症の追体験ができると同時に、その家族として、隣人として、社会として如何に認知症の方に接していくのかについても感じ、考えることができた。一人称だけでなく、二人称・三人称の視点で考えることができたと考えている。写真とVR、似ている表現方法のようで、人に伝える目的に全く違った効果があることに改めて気づいた。

現在、私は地元で認知症見守りネットワークを地域包括支援センターの方と協働で立ち上げている。参加者は皆様、地域に貢献したいと考えている企業や公共施設の皆様や地域のセーフティネットワークを支える民生委員や自治会の方ばかりである。可能ならいつの日か、その会合で松村講師の写真を提示して、参加者の皆様と認知症の方に「～してあげる」ことだけでなく、「自分事」として一緒に認知症について一人称と三人称の視点から学び、考えることを実施できたらと思う。